

新検査制度とパブリックの関与

Why is public involvement so important for inspection system to become effective?

マトリクス K / 近藤 寛子
東京大学

Hiroko KONDO

Member

Abstract

The role and process of external and internal stakeholder involvement in the nuclear regulatory framework would impact the outcome of the safety regulation. The public involvement in designing the new inspection system is discussed with the lessons learned from the ROP development in the US.

Keywords: public, involvement, inspection system, ROP

1. 開始から 19 年を迎えた米国 ROP

米国の ROP (アールオーピー) は 2000 年に開始された制度で、今年で 19 年目を迎えた。その前の制度である SALP (サルプ) も 20 年にわたり運用されたが、最後の数年間は、産業界・社会から制度に対する不信が募っていたことを考えると、ROP は米国において、もっとも長期にわたり信頼され続いた制度と言える。

2. 米国 ROP におけるパブリックの関与

ところで、米国 ROP の調査を行っている、しばしばパブリックという言葉に出会う。ROP におけるパブリックとは、「NRC (米国の原子力規制機関)、事業者として特定されない人」つまり規制する側でも規制される側でもない人、と、非常に広義な捉え方が可能な概念である。このパブリックが制度の信頼性において重要な役割を持つというのが本稿の考えである。

ROP の目的は、「原子力発電の利用における公衆の健康と安全を守る」であり、この目的を分解した重要な領域 (コーナーストーン) を 7 つ設定したものである。目的とコーナーストーンを、プラントの評価・検査の仕組み化するにあたり、リスク情報の活用と、パフォーマンススペースドというメカニズムを実装した。検査官による検査活動と、PRA のような科学的手法をインテグレートさせた、複雑な制度である。

ROP の理解者は当事者のみ、という密室規制に陥ら

ないよう、NRC は、開発当初より事業者、パブリックを交えた検討を行い、また、社会に対する情報発信を続ける。取組の背景には、前制度である SALP において、制度の実態を理解する関係者が事業者と NRC に限られ、パブリックにとって遠い存在となってしまったことの反省がある。ROP が、開かれた制度になるためには、パブリックとの関わりやパブリックとの対話努力が不可欠であったと考えられる。

NRC は ROP を定期的に検証する。検証内容は、指摘件数のトレンド、地域での分散状況など多岐にわたり、安全パフォーマンスの劣化傾向の有無、評価の地域間格差、などチェックしている。NRC が開催する、RIC (規制情報会議) と呼ばれる公開型会議では NRC 地方局長、NRC 本庁職員、事業者、第三者がパネリストとなり、ROP の運用状況をチェックし合っている。ROP 開始から 19 年経った今も、チェック行為が形骸化しないことは、ROP の健全性に寄与している。

3. まとめ

日本においても、この数年、ステークホルダーコミュニケーションの議論が広がりつつある。しかし、新検査制度の開発、運用におけるパブリックの関与についての検討はこれからであり、今後を期待したい。

参考文献

[1]NRC, RIC 2019